

イングランドにおけるプロ・サッカークラブの スタジアム変容に関する一考察

飯田 義明

A Study of the Stadium Transformation of the Professional Football Clubs in England

Yoshiaki IIDA

Abstract

The purpose of this study was to clarify the transformation process, how to finance of utilized a modernization stadium, and this transformation process placed in management history of football club in England. Thereof I consider about these from the point of view on social background such as structural change of Pro Football League and British Sky Broadcasting. I discussed about the reason why a stadium in England has been modernized, and has utilized as finance.

The stadium modernization has began at two accidents in a stadium caused by hooligans in England. After that, FAPL which includes the complicated factors such as a intervening of a satellite broadcasting by Murdoch and competing the initiative between the association of soccer and the soccer league. The expense of repairing a stadium was increasing as the soccer gradually grew as a huge industry worldwide. Therefore a way of raising fund attracted. its transformation was divided into four periods by the way of raising fund as follows;

The first period (-1990) : An English stadium was affected by Taylor report it changed from a pre-modern which was terrace-centered style to a modern stadium where all seats are reserved. The second period (1994 -1999) : till introducing hospitality business as a new way of raising fund in the modern stadium. The third period (1999-2004) : after profit of ticket in a stadium was controlled with securitization and raising fund from a market in a long term.

Key words : Professional Football Club, Stadium, Finance

1. 問題の所在

本論文ではイングランドのプロサッカースタジアム（以下：スタジアム）に焦点をあて、それを利用した資本調達方法に注目して変容過程を捉えるよう試みることにする。これまで、サッカーが研究対象として捉えられるようになってきたのは、フーリガンが社会問題としてクローズアップされてきた1960年代からである。そこで、まず日本およびイングランドにおけるサッカーに関する研究を概観してみたい^{注1)}。日本スポーツ社会学会は、2001年第9号で「サッカー社会学の可能性」という特集を組んでいる。このなかでムアハウスは、ヨーロッパにおけるサッカー研究を概観し、方法論上の様々な立場から「フーリガニズム」と暴力というテーマに支配された研究が分析的欠陥を含みつつ過剰に発表されてきたと指摘している（ムアハウス、2001）。また、2003年に日本フットボール学会が発足された。その際に、サポーターカルチャー研究をしている清水は、今後の研究視点として以下の8つを提示した（清水、2003）。(1) FIFA（システム）、ワールドカップ、J.リーグ (2) 経済・財政問題 (3) メディア研究 (4) プロ・クラブをめぐる問題 (5) サポーターカルチャー (6) プレイヤー、コーチ、プレイヤーをめぐる言説と身体的実践の問題 (7) プレイヤーの社会的キャリア形成における問題。 (8) メガ・イベント研究、である。このムアハウス、清水から引き出せることは、これまでの研究視点が偏っていたと言うことである。清水の分類立場に従うならば、(4)にあたるクラブの問題と(2)の経済・財政問題の両方にかかわるクラブ・マネジメントに関する研究は殆どないのが現状である。基本的にプロ・クラブの基本的な収益構造は、入場料収入、放映権料収入、広告料収入の3つの柱であるが、近年では新たな資金調達の方法が導入されているのである。イングランドでは、スタジアムを利用した資金調達が行われているが、それを研究対象としたものはない。少ないながらスタジアムに関する研究としては、ジョン・ベイルが地理学的アプローチからスタジアムが地域住民に及ぼす影響、その持つ

社会的意味について述べており、そしてスタジアムなどの経済・経営的な研究の必要性を述べている（ジョン・ベイル、1997）。しかし彼は指摘するに留めており、歩をその先に進めていない。また社会学的な立場から社会・経済的变化によりスタジアム・マネジメントが変容したことを指摘し、合理的な資本主義的な経営を進めなければならないと指摘する研究もみられるようになったWilliams, 1995; King, 1998)。特にJ.ウィリアムズは、改築・改修により近代化されたスタジアムにするための資金調達の方法として以下、1) 資産家のクラブ経営、2) 公共的なファンド、3) プレミア・リーグへの再編、4) ファンとクラブの新たな関係の構築、の4点を提示している。この指摘は、今まで経営上あまり関心をもたれてこなかったスタジアムが「合理的で資本主義的な経営」という視点を盛り込むことにより新たな資金調達が可能であることを示唆しているといえる。このような資金調達の重要性が指摘されるなか、近年ではクラブの経営的側面、特に資金調達のためのライセンス・ビジネスに注目した研究があらわれた（松本、2003a, 2003b）。これはクラブに資金調達のための必要性が認識されてきたためと思える。これらの流れのなか、スタジアムを利用した資金調達に関する研究として、アメリカで展開・発展してきたネーミングライツに注目した研究が散見されるようになってきた（仲澤、2005）。またスタジアムを利用したホスピタリティ・ビジネスに注目した事例研究などがある（大山・飯田、2003）。このように事例的に資金調達に注目し検討した研究は見られるようになってきたが、各クラブが資金調達のためにスタジアムをどのように利用してきたかという時系列的な視点での経緯を捉えられることはなかった。

そこで本研究は、イングランドにおいてなぜスタジアムが近代化され^{注2)}、クラブの資金調達の場として利用されるようになってきたのか、その変容過程をリーグの構造変化などの社会的背景から明らかにすることを目的とする。

2. スタジアムの近代化への前史

この章では、なぜイングランドにおけるスタジアムが近代化されることとなったのか、そこまでの歴史を紐解くことによって、その背景をフリーガン問題、メディア企業の台頭などによる新たな社会的な流れから明らかにしていく。

2-1 フリーガン政策とスタジアム

1990年までの歴史をフリーガン問題と政策という視点で分析をする。

2-1-1 1990年以前のフリーガン政策とスタジアム

プレミア・リーグ以前、イングランドのリーグはディビジョン1と呼ばれており、クラブ収入の大部分は観客収入に頼っていた。このころのゴール裏などの観客席はテラスと呼ばれた立ち見席であり、収入増加のために観客規定数をオーバーするのは日常的なことであった(Williams, 1995:230表1)。また60年代末からスタジアム犯罪が日常化してきた。そのため政府・大臣の諮問を受けたサッカー関係者は、報告内容を法的文書として提示した。その経緯として、まず1968年にスポーツ担当大臣デニス・ハウウェルの諮問を受け報告書が提出された。それによる勧告内容は以下、1)競技場の構造について2)競技場内や競技場周辺におけ

るコントロールについて3)クラブによる競技場改善や運営をめぐる役割について；この際に、すでに立ち見席の撤廃がクラブ側に要請され、現代的な軽食ルームや最新のトイレ施設などの設置といった「社会的快適性」をクラブ側に求めた4)審判員や選手の行為について5)クラブと住民との協力関係6)アルコールの飲酒についての6つである(中村, 2002:107)。しかし、こうした勧告は実現されることはなかった。なぜなら最終的に適切な安全性の基準は各々のクラブの自主的な判断でなされることとなったためである^{注3)}。各クラブはスタジアムを改修するための資金がないため、スタジアムは旧態依然としたままで改修されることはなかった。その後も様々なフリーガン問題が発生しており以下のような法令がだされている。1975年のスポーツ競技場における安全に関わる法律(Safety of Sports Grounds Act 1975), 1985年のスポーツの試合(アルコールの統制など)に関わる法律(Sporting Events (Control of Alcohol etc.) Act 1985), 1989年のサッカー観戦者法(Football Spectators Act 1989)など様々な報告書が提出されるが、政府はサッカー関係者に対して甘い対応を続けていたため、結局スタジアム自体が各クラブによって直接改修されることはなかった(中村, 2002:112-113)。

表1. Stadium capacities: clubs in the FA Premier League 1992/93

	Record attendances	Pre-Taylor capacity	Capacity 1994/95	Projected all-seated capacity		Record attendances	Pre-Taylor capacity	Capacity 1994/95	Projected all-seated capacity
Manchester United	76,962	51,000	44,411	44,411	Nottingham Forest	49,945	32,000	22,500	30,501
Tottenham Hotspur	75,038	35,000	24,500	40,000	Wimbledon	30,115	14,000	17,000	26,000
Arsenal	73,295	45,000	37,500	37,500	Blackburn Rovers	61,783	19,000	30,000	30,000
Chelsea	82,905	44,000	28,945	42,000	Aston Villa	76,588	40,000	40,530	40,530
Liverpool	61,905	40,000	40,000	40,000	Norwich City	43,984	26,800	21,272	21,272
Everton	78,299	41,000	40,500	40,500	Ipswich Town	38,010	31,000	22,260	22,260
Lees United	57,892	32,000	40,000	40,000	Sheffield United	68,287	32,000	23,000	30,388
Queen's Park Rangers	35,353	23,000	18,500	18,500	Southampton	31,044	22,000	16,000	16,000
Crystal Palace	51,482	31,000	17,000	26,000	Coventry City	51,455	26,000	22,600	22,600
Oldham Athletic	47,671	19,000	12,260	20,000	Manchester City	84,569	44,000	21,357	36,000
Sheffield Wednesday	72,841	38,000	36,000	36,000					
Middlesbrough	53,596	27,000	22,000	44,000	Totals		712,800	598,135	704,462

Source: Adapted from *Independent*, 15 April 1994.

2-1-2 二つのスタジアム崩壊事件

イングランド・サッカー界は、1960-1980年代まで世界的にもその悪名を轟かせた「フーリガン問題」などを含む諸問題を抱えていた。しかし政府の施した対策をフーリガン達は様々な手段で警備をかいくぐっていた。このような状況のなかで、1985年5月29日にブリュッセル市のヘイゼル競技場で行われた欧州チャンピオンズ・カップ決勝戦を前にして、スタンドのフェンスが崩壊し、死者41人、重軽傷者350人が起こった。この事件によりイングランドのフーリガンは世界中の人々が知ることとなった。そしてサッチャー政権はこれを契機として一段とサッカー界に対しても厳しい姿勢で臨んだ。それを受けて発令されたのが、スポーツの試合（アルコールの統制など）に関わる法律（Sporting Events (Control of Alcohol etc) Act 1985）である。この法律施行後に観戦者に会員カード（membership cards）の取得と保有を義務づけ、会員カードの非保有者には競技場への入場を認めないという「資格会員制」（a national membership scheme）の導入を図るサッカー観戦者法（Football Spectators Act 1989）などの法律が施行された。これらの法令は、スタジアムの改修を促すものではなく、基本的にはフーリガンスタジアムに入れたいための法令であった。これによりフーリガンに対する取り締まりを強化することとなったが、この警備なども潜り抜けこの法令が施行された直後の1989年4月15日にヒルズボロ・スタジアムで死者150名、重軽傷者96名をだすこととなる大惨事を引き起こすことになった（以下：ヒルズボロの悲劇）。この悲劇直後にテイラーを団長とした原因を明らかにするための調査団が結成され、同年8月に「中間報告」を、翌年1月に「最終報告」であるテイラーレポートが政府に提出された（中村、2002:113）。それまでサッカー協会（FOOTBALL ASSOCIATION：以下FA）、各クラブに対して寛容であった政府が、一変して厳しい態度で観戦環境の改善勧告を行うこととなった。そこで次にテイラーレポートの内容分析から各クラブへ与えた影響を明らかにする。

2-1-3 テイラーレポートとその影響

テイラーレポートの報告を受け、FAおよび各クラブは様々な対応を求められることとなった。このレポートでは、1) サッカーの現在と未来（FOOTBALL:PRESENT AND FUTURE）2) 試合場の安全性（SAFETY AT SPORTS GROUNDS）3) ファンの管理とフーリガニズム（CROWD CONTROL AND HOOLIGANISM）4) サッカー観戦者法（THE FOOTBALL SPECTATORS ACT 1989）5) 最終勧告（FINAL RECOMMENDATIONS）という5つのパートからなっている。この109頁からなる報告書において最終勧告として14点について指摘している。1) 全席指定席（All-Seated Accommodation）2) カウンシルデザイン報告（Advisory Design Council）3) 国家視察と身体検査（National Inspectorate and Review Body）4) 観客席の上限（Maximum Capacities for Terrace）5) 食事とテラスの監視（Filling and Monitoring Terrace）6) 通路に関して（Gangway）7) 金網と出入口（Fence and Gates）8) 柵の取り壊し（Crush Barriers）9) 安全証明書（Safety Certificates）10) 各クラブの負債（Duties of Each Football Club）11) 警備計画に関して（Police Planning）12) 情報に関して（Communications）13) 緊急体制の再配置（Co-ordination of Emergency Services）14) 応急手当、メディカル施設と救急車に関して（First Aid, Medical Facilities and Ambulances）の14項目に対して特に提言が行われた（Taylor, 1990）。そして各クラブに大きな影響を与えたのは、サッチャー政権がサッカー観客法案の第一部を撤回するという決定を下したことである。なぜならば、この法案の第一部は試合の参加者をコンピュータで管理することが中心事項になるようになるような措置であったからである。この内容がテイラーレポートによって撤回されてしまった（Dunning, 2001:133；翻訳、2004:234）。そのため、各クラブは独自にサッカー競技場の安全対策の実施をしなければならなくなった。ジョン・クウィットによると「全座席の勧告は大きな議論を巻き起こした、というのはイギリスにおけるサッカー競技場の少なくとも50%は立ち見席のテラ

スであると考えられていたからである」(中村, 2002:117)。なぜなら観客にとってテラスというのは歴史や記憶の堆積された場所であり、かつ労働者階級の週末の安価な楽しみの場所でもあったからである。しかし勧告により各クラブは、全スタジアムを全席指定席化するよう改修工事が義務付けられ、その達成期限を当時の1部2部リーグについては1994年8月までに、同じく3部4部リーグについては5年後とされた。そのためスタジアムの改修工事費に加え、全席指定席になったためテラス時より総入場者数の減員から観客収入が減少し、各クラブは資金不足に陥ることとなる。ゆえにクラブは今まで以上に資金調達を積極的におこなう必要性がでてきた。今までのクラブ運営は、運営額規模が小さくビジネスの素人が井勘定でおこなわれていたり、地域の名誉職として行われているのが当たり前であった。しかし、今回の事件を契機としてイングランドは近代的なスタジアムへ変容しなければならなくなり、そのため各クラブは莫大な資金が必要になった。そこでスタジアムで如何に資金調達するかが大切な問題として浮上してきたのである。このような背景から、様々なクラブで経営を専門とするビジネスマンが登場してきた。そして余暇の楽しみとしてのフットボールから市場の資本が介入するビジネスへのフットボールへと大きく舵を切っていくこととなった(Hone,1999:52)。一部はFootball Trustが設立され、スタジアム改築などのために資金が貯蓄され各クラブに分配された。

2-2 ルパード・マードック (以下:マードック) の出現とプレミア・リーグの誕生

2-1でフーリガン問題と政策の関係から各クラブがスタジアムを改修しなければならなくなった経緯を明らかにしてきた。しかしその一方、スタジアムを改修することを可能にした資金的側面については明らかにしていない。そこでこの項では同年代までの流れをメディア企業の台頭という観点に絞り明らかにしていく。

2-2-1 サッカー・リーグの構造的変化

イングランドではFAとサッカー・リーグ(FOOTBALL LEAGUE:以下FL)の二つの組織が歴史的に対峙しながらサッカーを発展させてきた。FAという団体は、1863年にパブリックスクールの卒業生が中心となりイングランド南部のいくつかのクラブが集まり、統一ルールを定め設立された(Hamil et al, 2003)。初期のサッカークラブに属していた選手や指導者はアマチュア精神に忠実にプレーをしていた。そして1905年には、FAは加盟クラブが1万を越え、1910年にはアマチュアの登録選手が30万人を数えるまでになっていた。その後、FAは代表チームの管理と草サッカー(grass roots)の普及を中心として運営されていた。それに対しFLは、1883年にFAカップにて労働者クラブであるブラックバーンが優勝することによって、プロとして立ち上がる契機となった。そして1888年3月22日にアンダートンのホテルでの会議で、プロ・リーグであるFLが設立されることとなった。試合においてもパブリックスクールの卒業生が中心としたクラブではなく、北部の労働者階級を中心としたクラブが躍進するようになってきた。そのため1888年9月8日に12のクラブで最初のリーグが開幕された。そしてFLは、1892年に2部リーグがつくられ更に拡大してリーグ戦を運営していった(アルフレッド・ウォール,2002:29-32)。1991年までにFLは4部リーグを抱え、92のプロ・クラブのメンバーに対し利益に重点を置いた巨大な組織となっていった。以上のようにこの二つの団体は、お互いに別々の役割をこなしていた。しかし、FAは代表の低迷、収益面の低迷など様々な問題を孕んでいた。また、巨大産業へと突き進んでいるヨーロッパのサッカーに対し、イングランドは遅れを取っていた。その大きな原因のひとつが、前章で検討したフーリガニズムであり、1970年～80年代後半にかけては、サッカースタジアムに足を運ぶ観客は約3万人から約1万6000人へと激減していた(Gratton, 2000:19)。そのため、ヒルズボロの事件以後、1991年にFLのトップ18のクラブは独自にスーパー・リーグ構想を打ち立て、FAからの報告書と

して提出した。これが“Blueprint for Football”「フットボールにおける未来」(以下:BF)であり、内容はFLから独立したプレミア・リーグへのリーグ改変が提案されたものであった(Dunning, 2001:121 ; 翻訳,2004:125)。これに対し、FLは強く提案に抵抗したが1991年6月14日に16のクラブは、FAプレミア・リーグ(以下:FAPL)に参加を表明し文書に署名をした。何ヶ月にも及ぶ財政的な論争とプレーヤーのストライキの脅威などにより22のクラブがFLから脱退し、1991年9月23日にFAPLが公式に決定した。最終的には、FAPLの20クラブとFLの3部リーグの72クラブで昇格、降格を3クラブで同意することとなった(<http://www.football-league.premiumtv.co.uk/page/History/0,,10794.00.html>)。このような背景のもと新たなリーグが開催されることとなった。つぎにこの新たな形でスタートをしたFAPLを支えたメディア資金について明らかにする。

2-2-2 マードックの出現とBritish Sky Broadcasting (以下:BSkyB)のメディア戦略

1960年代の中頃までは放送を断られるなど、イングランドのプロ・サッカーはテレビとはあまり良い関係であったとはいえなかった(Williams, 1999:30)。サッカーのテレビ放送は、1937年にBBCがFAカップの決勝の一部を放送したのが始まりである。その後の1979年以降、BBCとITVネットワークが共同で92クラブの連盟(FL)と放送権の一括販売契約を締結していた。この収益は全国のクラブに対して平等に放送権料を配分されていた。またBBCとITVがカルテルを組んでいたため、FLには放送見料に関する交渉権がなかった(中村, 2001:56)。このような状況のなか、オーストラリア人のメディア王マードックは、1985年「タイムズ」紙および「サンデー・タイムズ」紙などタブロイド数紙を買収した。そして1988年8月には、「テレビ新時代の幕開けにして、30年以上前の英国商業テレビ発足以来のかつてない劇的な放送革命」と宣言し、そして衛星放送サービス「BSkyB」の開始を発表した(カシュモア, 2003:106)。その後、彼は「豪ニューズ・コー

ポレーションの英国支社ニューズ・インターナショナルが運営するスカイテレビをBSkyBに先駆けて、89年2月に映画・スポーツ・娯楽・ニュースの四チャンネルで放送を開始する」とし、「我々は、視聴者が選択の自由を持つ新時代の幕開けに邁進する」と述べた。これは、イングランドのテレビを長期にわたって独占してきたBBCと商業チャンネルITVネットワークという地上放送事業への挑戦だったといえる(中村, 2001:55)。1990年11月に今までのトップリーグの5大クラブとBBC総裁のグREG・ダイク(当時、ロンドン・ウィークエンド・テレビジョンの経営者)は、マードックに放映権を独占されることを阻止するために既存のFLから経営的に独立した新しいリーグの設立を提案した^{注4)}。FAから政府へ提案されたBF、テイラーレポートによりスタジアムを改修することとなった各クラブへの資金的影響など様々な思惑が交錯するなかでプレミア・リーグ(The FA Premier League 以下:FAPL)は誕生することとなった。本来ダイクの目論見は、各クラブと地上波のBBC、ITVと組みマードックに放映権を渡すことを妨げることであった。しかしBSkyBは4年間で3億5000万ポンドを提示し、BBC、ITVなどの競争に勝った。そのため1992年にFAは、BSkyBにプレミア・リーグの独占ライブ放送権を与える新たな契約を発表することとなった(Williams, 1999:30)。そしてこの直後の1993年にはマードックのフォックス・ネットワークがアメリカでNFL(アメリカンフットボール)の放映権を4年間10億ポンドで手中に収めた(カシュモア, 2003:111)。このようにはマードックは、サッカーをBSkyB契約者獲得のためのキラーコンテンツとして位置づけており、そのために高額な投資をしたのである。

このように独占的ライブ放映権をBSkyBが獲得し、FAに巨額な放送権料が流れ込むことによりFAPLの成功がある。そして、その巨額の資金をFAPLの各クラブに配分することによって、テイラーレポートにおいて指摘されていた全席座席の近代的なスタジアムへ改修することが可能となった。それに伴い、観客一人あたりの平均支払い

が90/91年シーズンは6.46ポンドであった入場料がプレミア・リーグのスタートした92/93年シーズンには8.74ポンドとなり、96/97年シーズンには14.60ポンドに高騰するなどし、今まで週末にスタジアムに足を運んでいた労働者たちが来ることができなくなるなど、別側面での問題点を提起することにもなった(Williams, 1999:36)。しかしそれだけでは資金不足を解消することは不可能であった。そのため新しく改修したスタジアムを利用して更なる資金調達が必要であった。それがスタジアムを利用したホスピタリティであり、スタジアム・チケットを利用した証券化である。

3. 資金調達の場へ変化したスタジアム

前章までに、イングランドがスタジアムを近代化することになった経緯を明らかにしてきた。ここでは、それまでスタジアムを利用して資金調達を行うことがなかった。そこで、テイラーレポートが提出された1990年までを第1期(～1990年)と定義し、その後の経緯についてスタジアムを利

用した資金調達方法がどのように行われているのか、期分けを行うことにより、その変化について明らかにしていくこととする(図1)。

3-1 ホスピタリティ・ビジネスの出現 (第2期：1994-1999)

テイラーレポートの影響により、各クラブは経営戦略を見直さざるをえなくなった。そのため経営の重要な収入源になるマーチャンダイジングの強化、スタジアム収入の増加など、基本的な部分が再評価されてきた。このような経営戦略転換のなかで、観客収入という収益基盤をなすビジネスを積極的に押し進め、観客収入を増加させ過度にメディア収入に頼らない経営の確立を目指すクラブが出現してきた。株式会社化したそれらのクラブは、分社化しスタジアム運営の会社を立ち上げ、観客収入を高める努力を始めた。その方法として登場してきたのがVIP席やホスピタリティ席である。これらは最高級のサービスによって、観戦だけでなくスタジアム自体を社交場に換え、週末の家族のためのスペースへとスタジアムを変えた

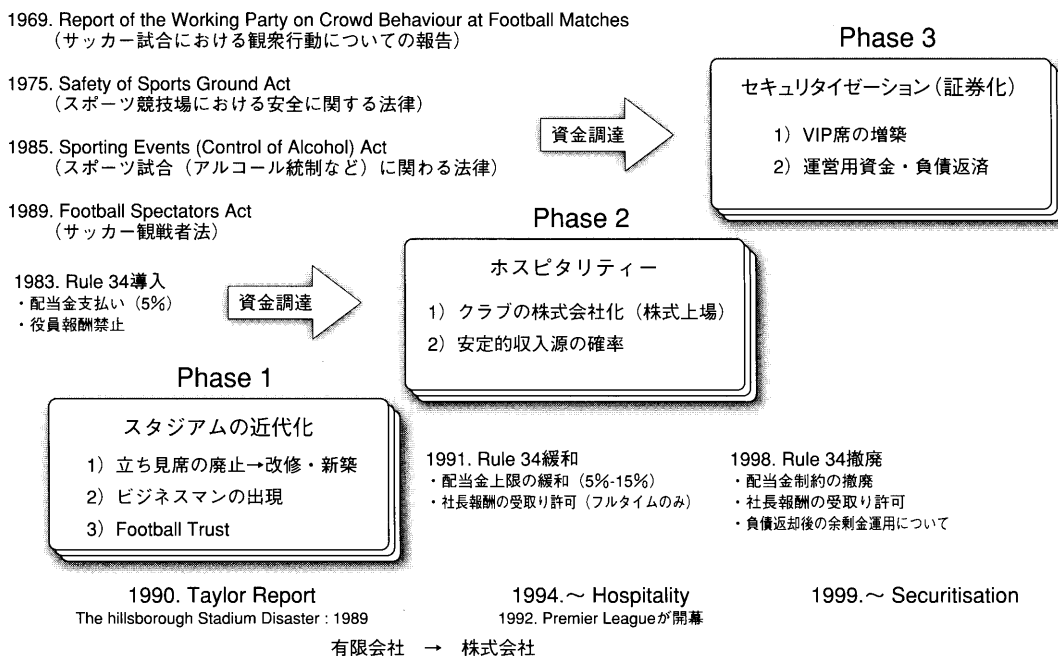


図1. テイラー・レポート(1990年)以後のスタジアムを利用した資金調達方法の変化 (2004:スポーツ産業学会発表 飯田)

(大山・飯田, 2003)。このようにプレミア・リーグにおけるスタジアムによるビジネスは, 1990年代中頃から本格化した。スタジアムの近代化に伴って, クラブは株式会社化し, メディア資金に頼る経営ではなく, 堅実な運営基盤を確立するために観客収入を高める努力を始めた。その戦略として採用されたのが, ホスピタリティ・ビジネスであった。これは, スタジアムの改築に伴いVIPと呼ばれるホスピタリティ席を増設し, 通常よりも高い値段で最高級の席でもてなすサービスである。本拠地で開催する19試合すべての飲食を四つ星クラスの料理で歓待し, 試合観戦だけでなくスタジアムを社交場に変える方法である。これによりスポンサーは取引先や特別な顧客, または有力な株主などのゲストを試合に招待して, ビジネスにつなげるチャンスとしても活用している。また, それ以外にも様々なサービスでチケットの付加価値を高めている。

3-2 スタジアムのセキュリタイゼーション (証券化) へ (第3期: 1999-2004)

各クラブは更なる資金が必要となり新たな資金調達方法をつくりだした。それがセキュリタイゼーションである。これは1999年頃から登場したスタジアムを利用した資金調達の方法である。クラブがこの方法を使用する理由は, 株式市場がフットボールクラブへの興味を失い, クラブ株の需要が止んだことと関係がありクラブの収益が減収したからである。それに伴い, スタジアムやユースシステムに多大な投資を必要とするクラブに大きな財源の空洞化が生まれたと指摘されている(Soccer Investor, 2003:6-8)。セキュリタイゼーションとは負債財源の一種であり, 負債者は自らが所有する特定の資産から得られる長期的な見通しのついた収入源を返済にあて投資家から資金を得ることである。証券の形で募られた投資額の返済は, 指定された資産が生み出す収入が割り当てられる事でなされている。クラブで最も長期的な歳入が期待される収入源はチケットの販売収入であり, 幾つかのクラブがチケット収入をセキュリタイゼーションに使用している。最初にチェルシー

が1997年に契約を交わしている。その後, 交わされた取引の多くは, スタジアム増築関連の資金供給(ニューカッスル, サウザンプトン, レスター・シティ, イプスウィッチ)が主な理由であった。しかし最近になり, クラブ(リーズ, エバートン, マンチェスター・シティ)は他の負債の返済計画を再構築し, かつ新たな選手を獲得するための資金調達にこの方法を利用している。最も新しく行われたスパーズの取引では, 新規プロジェクトの資金調達に使われるなど, 現在あらゆる局面で使われているのが現状である(Soccer Investor, 2003:7)。

4. むすびにかえて

本研究は, イングランドにおいてなぜスタジアムが近代化され, クラブの資金調達の場として利用されるようになったのか, その変容過程をリーグの構造変化などの社会的背景から明らかにすることを目的とした。まずスタジアムの近代化は, イングランドを悩ませたフリーガンが引き起こしたスタジアム事故を契機として, その後にマードックの衛星放送の介入, サッカー協会とサッカー・リーグの主導権の争いなど様々な要因が複雑に絡み合っただけでFAPLが成立した。そして世界的に巨大化したサッカーの産業化の流れ, スタジアム改修の資金の必要性のなかでスタジアムを利用した資金調達の方法が注目されるようになったことが明らかになった。

また, クラブ経営からスタジアムを利用した資金調達の方法論からは以下のように期分けされた。

- 1) 第1期(～1990年)をテイラーレポートの影響を受け, イングランドのスタジアムがテラスを中心とした前近代的なものから, 全席指定席の近代化されたスタジアムへの移行が決定づけられるまでとした。
- 2) 第2期(1994～1999)を近代化されたスタジアムにおいての新たな資金調達としてホスピタリティ・ビジネスを導入するまでとした。
- 3) 第3期(1999～2004)をスタジアムにおけるチケット収益をセキュリタイゼーション化し,

長期的に市場から資金調達が行われるような
なった時期から現在までとした。

今後は、イングランドにおけるプロ・サッ
カークラブのその後の変化も含め、現実的な
数値を基にしたスタジアム運営の経営分析や
セキュリティゼーションのシステムの在り方
やその有用性、問題点などを明らかにしてい
かなければならないだろう。

【注】

- (注1) 内海は、ムアハウスが一橋大学で行った
講演と彼の論文をまとめた論文で、この
30年間におけるヨーロッパでのサッカー
の社会学を批判的に検討し、総括し、偏り
があるものの10領域をカバーしていると
している(内海, 2003)。また2000年から
J.A.Mangan 等のイングランドの研究者が
中心となり Soccer and Society のタイト
ルで論文集が発行されるようになった。
- (注2) この論文においての近代化とは、立ち見
席及び金網に囲まれずし詰め状況の環境
から、トイレなどの施設がしっかりと整
えられた全席指定の環境への移行を近代
化と捉えている。
- (注3) 1946年のボルトンワンダラーズ・サッカ
ー競技場での惨事を受けた報告書により
勧告書が提出されている。しかしこの勧
告は実現化されなかった。この際に、政
府とサッカー関係者との協議の結果とし
て適切な安全性の基準は各々のクラブの
自主的な判断に任せる形で覚え書きを交
わしていた。1969年の時も最終的には、
その覚え書きに従ったのである。
- (注4) マードックが率いる BSkyB が、どのよう
なプロセスでプレミア・リーグの放映権
を独占することになったかはカシュモア
に詳しい(カシュモア: pp.100-110)。

【引用・参考文献】

- ・アルフレッド・ウァール ; サッカーの歴史.
創元社. pp.22-32, 2002.
- ・Dunning, E ; Sport Matters : sociological
studies of sport, violence and civilization,
Routledge, London and New York, pp. 122-
123,1999. (大平章訳, 「問題としてのスポ
ーツ - サッカー・暴力文明化」法政大学出
版, p127, 2004.)
- ・エリス・カシュモア ; ベッカム神話 - 全地球
的アイドルの研究 -, NHK出版, 2003.
- ・Gratton, C ; The Peculiar Economics of
English Professional Football. Soccer and
Society, Frank Cass · London, Vol.1 No.1
pp.11-28, 2000.
- ・Hamil, S. et al ; The State of the Game - The
Corporate Governance of Football Clubs
2003-, Football Governance Research Center,
2003. (<http://www.football-research.org>).
- ・H.F.ムアハウス ; ヨーロッパのサッカー社会学,
日本スポーツ社会学会. No.9, pp.1-12, 2001.
- ・Hone, John. Alan Tomlinson, et. al. ;
Understanding SPORT - An Introduction to
the Sociological and Cultural Analysis of
Sport, E & FN Spon, an imprint of
Routledge, pp. 52-53. 1999.
- ・ジョン・ペイル ; サッカースタジアムと都市,
(株) 体育施設出版、池田・土肥・高見訳,
pp. 129-141, 1997.
- ・King, A ; The End of the Terraces : The
Transformation of English Football in the
1990s . Leicester University Press, London
and New York, 1998.
- ・松本健児 ; スポーツビジネスにおけるフラ
ンチャイズ・バリューに関する一考察, 東洋
大学大学院紀要 第39集 pp. 197-214, 2003a.
- ・松本健児 ; ライセンス・ビジネスに関する一
考察 - 知的財産を活かす経営 -, 日本経営
教育学会 第6集 pp. 93-107, 2003b.
- ・中村美子 ; ヨーロッパにおけるスポーツ放送

- とユニバーサル・アクセス, 「スポーツ放送権ビジネス最前線」, 花伝社, pp.53-73, 2001.
- ・ 中村祐司; “スポーツ行政をめぐる政策ネットワークの研究“スポーツのサブ政策領域におけるネットワークの形成 -イギリスサッカーフーリガン対策をめぐる諸アクター間の関係変容- . 早稲田大学提出博士論文, pp107-127, 2002.
 - ・ 仲澤眞; 公共スポーツ施設におけるネーミングライツ契約の導入に関する研究 - 導入の過程および導入の影響を中心に -, 日本スポーツ産業学会第14回大会, pp. 75-76, 2005.
 - ・ Lord Taylor ; Inquiry into the Hillsborough Stadium Disaster, Final Report. London HMSO, 1990.
 - ・ 大山隆太, 飯田義明 ; イングランドにおけるスタジアムビジネス - Tottenham Hotspur FCを事例として - 専修大学社会体育研究所報 第51号, pp. 1-16, 2003.
 - ・ 清水諭; サポーターカルチャー論序説 - 空間としての浦和と民衆の戦術 -, 日本フットボール学会発足記念シンポジウム「サッカーの社会学」資料.2003.
 - ・ Soccer Analyst ; Football securitisation, Vol. 3, pp. 6-8, 2003.
 - ・ THE OFFICIAL WEBSITE OF THE FOOTBALL LEAGUE ; History of Football league. 2005.7.現在.
(<http://www.football-league.premiumtv.co.uk/page/History/0,,10794,00.html>)
 - ・ 内海和雄 ; 「サッカー社会学」の誕生 - H. F. ムアハウス氏の所説を中心に -, 一橋論業, 第123巻, 第2号, pp.231-248
 - ・ Williams, J. ; The Stadium and The City : English Football Stadiums after Hillsborough, in John Bale and Olof Moen(ed). Keele University Press, pp. 219-253, 1995.
 - ・ Williams, J. ; Is it all over? Can football survive the Premier League?. South Street Press, 1999.